

まず、前期に書いた私の日本語哲学を読み返してみた。私は前期の授業内容を作るに当たり、教案と教材を作成するのに時間がかかったと書いていた。また、単に楽しいと思える授業よりも、沢山発言が飛び交う授業を目指したいと思って準備をした。教材を作るにあたって、字の大きさに配慮し、同じグループの人の工夫された教材を次の自分の授業で取り入れたりした。YMCAでの授業では、教室の広さについて考えなければならなかった。一番後ろの席の人まで見えるようにできるだけ大きく太く文字を書いたり、絵カードを用意したりした。授業前日のリハーサルが、教案の試行錯誤の場にもなっていた。例えば、教材の貼り方の工夫に関して、同じグループの人のアイデアを取り入れたりして、自分のベストの教案を作るように試みた。

後期の授業が始まり、すぐに実習の準備に取りかかった。私は一回目の授業で45分の教案をつくり一人で授業を行うことになった。最初から一人で、不安と戸惑いがとても大きかったことを今でも覚えている。“会話”では、教師と学習者のやりとりが大事であると思ったため、先輩が実習で取り入れていた交互に読むワークを多めに取り入れた。また私が今回の三回の授業で共通して力を入れた部分は、「一つのワードからどこまで授業を展開させるか」という点に気を付けたところである。発展し過ぎると逆に学習者にとっては分かりにくい授業になってしまうので、横溝先生にしっかりとアドバイスをいただきながら進めた。会話を覚えさせるところまでもっていく内容にしたので、会話を少しだけ変えて使わせる内容も入れた。学習者みんなが一生懸命に参加してくれて私はとても感動した。「学習者は敵ではありません、授業を一緒に創っていく仲間です」ということばの意味が分かった瞬間だった。授業の終礼と同時に、私は涙が止まらなくなった。授業を自分の思うようにできなかったこと、そして、この授業に参加してくださった学習者の皆さんへの感謝の思いが原因である。私は最初の一回目の授業は特に教案ばかり見ていた。説明する際もほとんどホワイトボードばかりを見ており、学習者とのアイコンタクトがほとんど無かったとビデオを見て思った。前期では学習者が二人であったことから距離も近くコミュニケーションしやすかったけれど、後期の一回目の授業プラス約20名の学習者だったので、緊張で教案自体の内容が入ってなくて頭が真っ白になってしまった。学習者とのアイコンタクトは大事で、教師の表情で授業の雰囲気が変わってくることを学んだ。

一回目の授業で悔しい思いをしたので二回目以降、教案はなるべく早めに作り始め、学習者とアイコンタクトを取ることを意識して授業を成功させるよう努めた。授業中の立ち位置については先生に褒めて頂いたので、それは続けていこうと思った。二回目は答え合わせ、最後の授業は言葉の復習を、絵カードを用いながら動詞の確認を行った。どちらも共通して気を付けなければならないことがあった。それは「学習者からの多様な発言をいかにうまく沢山拾い、フィードバックを行うか」ということである。フィードバックの難しさは前期にも経験していたのだが、後期の実習ではそれをより感じた。自分の意見を述べるという学習者にとっても少し難しいワークでは、それぞれみんな違う意見が出て、とても面白いと思った。私は授業の中で、一人の学習者に指名してその答えを全体で共有す

るスタイルをとったが、なかなか上手いかなかった。それは優しい日本語ではなく難しい日本語を私が使っていたからである。伝わっていなかったことに後の反省会の時に気付いた。学習者に未習の日本語を無意識に使うことは良くない。事前に学習者がその語句を知っているか調べておいて、それから教案を作ることが必要になってくるのだ。それでも教案の中では未習単語を含ませてしまっていたので、細かく調べないとならないことを改めて実感した。

最後の授業では、YMCA で使われている本の絵の拡大を教材として使用した。動詞を言わせる活動を終えたら、復習内容が主だったので、習った動詞を使わせて解くプリントを用意し、解く時間を設けた。私のこの時間での反省点は、タイムマネジメントが出来ていなかったことだ。授業の終わりが迫っている中、動詞の確認を全員に当てて時間を使ってしまう、プリントを解く時間と発表に時間を割くことが出来なかったのが心残りである。そんな時間のない中でも、学習者は沢山答えを書いてくれ、私はとても嬉しかった。ビデオをみて一回目の時と比べて成長しているなど思ったところは、アイコンタクトと授業の際の表情だった。指名するとき学習者の目をしっかり見て、「そうですね」と言っていたので、良かった。学習者もこちらを見て答えてくれたのが、また嬉しかった。授業の時は最初の頃、私はどんな時でも笑顔が多かったが、最後の授業では表情の使い分けがまだできていた方だと思う。またディスカッションの時間は私たちにとって有意義な時間になった。外国人と日本語でフリートークをするということはなかったのですが、とても楽しく、国の文化や習慣、他にも沢山のことを知る良いきっかけになった。学習者が夢中になって話してくれるので、それも嬉しかった。

私は今回の北九州 YMCA での実習を通して、人前で話すことへ対しての恐れが無くなって、堂々と話せるようになったと思っている。実習で自分の思う通りの授業が出来たかどうかであるが、「大成功」までとは到達していないと思っている。しかし、確実にみんな成長しているのも事実だと思う。授業の回数を重ねるごとに「確実にもっとこうした方がいい」などアイデアが浮かんで、友達や先生に相談して、より良い授業にしていこうと努力した。日本語教員の仕事は毎日新たな発見がきつとあって楽しいだろうと私は思う。分かったと反応してくれた時はとても嬉しいし、分からないと示されたときはどういう風に教えたら伝わるかを考えて次の授業に活かす。教案を作るときは本当にうまくできるのか不安で一杯だったけれど、いざ教壇に立つと、緊張もあるが学習者の暖かい視線が頑張ろうというやる気に変えてくれたのである。私たちはあの 19 名の学習者を担当できて、本当に良かったと心から思っている。今までの三年間の日本語教員の授業の最後の締めだと思って頑張ってきて良かった。実習を終えて、改めて日本語教員はいい職業だなと思っているので、これから就職活動が始まるが、就職先の候補に入れたいと思う。

今後、日本語を教える立場になったら、私は二つのことに留意したい。一つ目は、決断するということだ。授業の終了時間が迫ってきたら、出来ることは限られているので何を優先させるべきなのか考えなければならない。省略できるところは省略して他の時間に回

すという決断が今回の実習では出来なかった。時間通りにうまくいく教案をいつかは一人で作ることが出来るようになりたいと思った。二つ目は声の大きさだ。ビデオで見たら、声の大きさが三回通してそんなに変わりがなかった。声の大きさと同時にジェスチャーで表現したらもっと楽しい授業が作れるのではないかと思った。YMCAのN先生の授業は、本当に素晴らしくて、聞いていて楽しかった。みんなを巻き込む授業が出来たらいいなと思う。今回、お世話になった北九州YMCAの皆さん、学生の皆さん、N先生、そして横溝先生。素晴らしい日本語教育実習に協力して下さった皆様に感謝している。